

第4章 中世城館跡調査

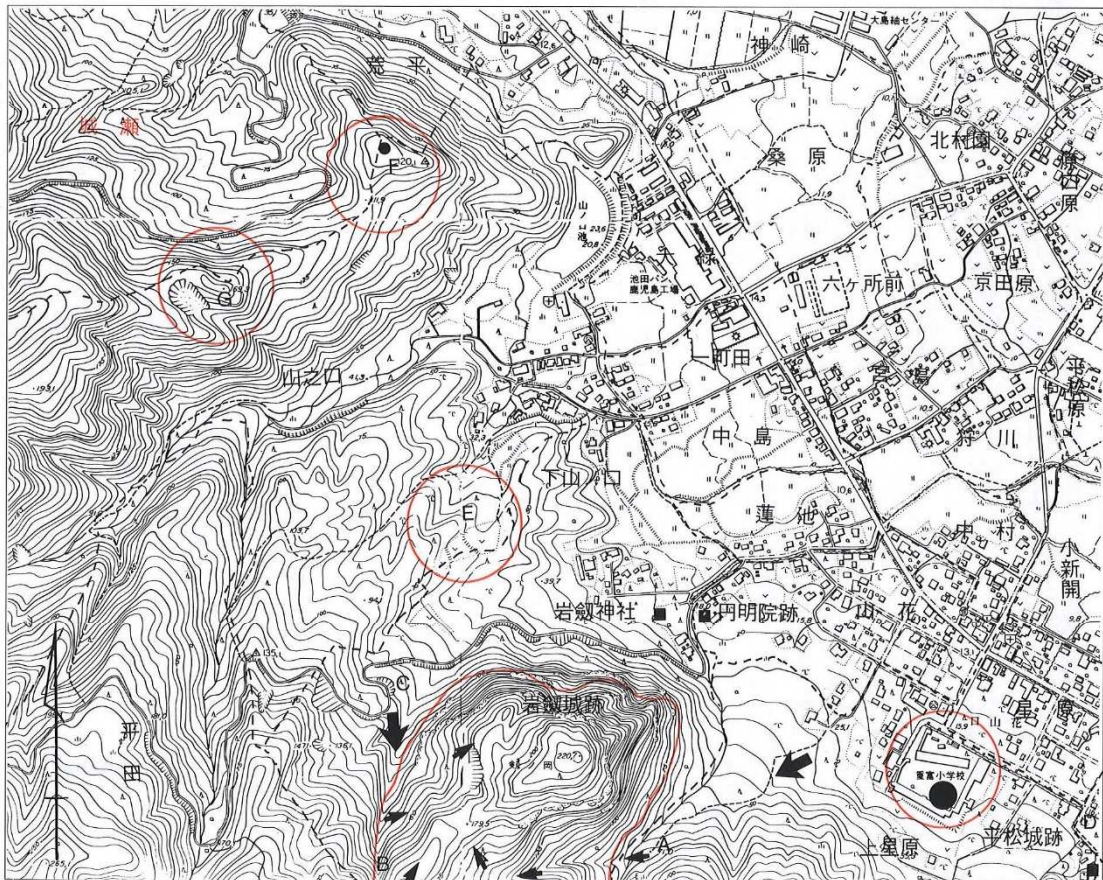
1 岩劔城 所在地 平松 字下山ノ口

岩劔城は重富小学校の西500mに位置し、平野部に突き出た険阻な岩山上に築かれている。第5図によって以下説明する。朱線内の山城区域は小字下山ノ口に含まれる。北東端にある山頂は標高約220.7mあり、帖佐・重富・加治木の平野が一望できる。また、戦国時代にこの地方の主な合戦場となった平山城・新城・加治木城の諸城が肉眼で遠望できる。

城の大手口は、館のあった重富小学校側の図中Aであり、矢印方向に従って城内へ達することができる。現在A地点には砂防ダムが建設されている。搦手口は城西側のC方向と考えられる。城の南北には溪流があり、北東方向に流れる。山麓には岩劔神社と円明院跡がある。

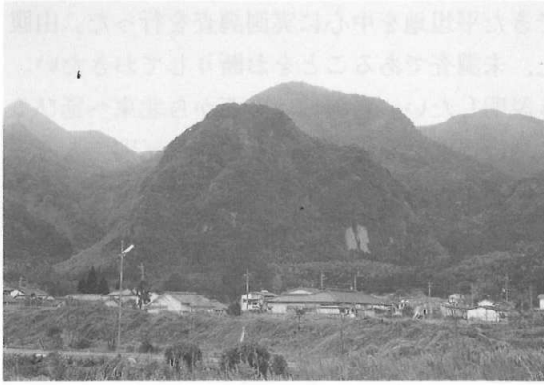
岩劔城は、享祿2(1529)年頃に築城され、蒲生家の家臣が守っていたといわれる。その後、天文23(1554)年の戦国島津氏と蒲生方との戦いでは、この一帯が主戦場となり、ついに同年10月3日に落城したという^①。岩劔城には、この戦いで初陣を飾った島津義弘が在番することになり、山麓に館を築いて3年間在城したと言われる^②。

城の野首Bを南西に尾根を登ると島津方の惣陣鹿倉山へ至る(90頁参照)。同じく城の北西E地点周辺は島津方の日当比良陣跡と伝えられている。また、図中G~Fにかけてが狩集陣跡と言われているが^①、尾根上には明確な遺構は残存しない。尾根の東端にはテレビ中継所があり、その南側中腹には何枚かの削平地があるが、今回は調査できなかった。



第5図 岩劔城跡周辺地形図及び小字図

写真1 岩 劔 城



岩劔城遠景（北から望む）



岩劔神社社殿



石垣（第6図中E）



空堀2（東から写す）



空堀8



▲ 西側から望む（頂上部は曲輪10）



◀ 空堀6

今回の調査範囲は、山頂部及び尾根上に確認できた平坦地を中心に実測調査を行った。山腹については、高低差が大きく又調査の安全対策上、未調査であることをお断りしておきたい。

岩劔城の遺構については、以下**第6図**に基づき説明したい。岩劔城は南西から北東へ延びる尾根上に遺構が並び、北東端に頂上部がある。城域は空堀2を境に城内と城外に区別できる。

空堀2の東側には土塁1が「く」の字状に巡る曲輪1がある。土塁1南面には犬走りDがあり、虎口Cに至る。虎口C西側は絶壁であり、曲輪1とは約60cmの段差がある。曲輪1は台形状で長辺約22m・短辺約16mあり、中央には方形(約6m×6m)の石列が残り、建物の基壇跡を思わせる。曲輪1から見た土塁1との比高差は約3.6mあり、空堀1の堀底からの比高差は約7mある。土塁1は東部で次第に下がり、B地点で高さ約50cmとなる。曲輪1の北側には帯曲輪状の平坦地が3段あり、一部に石積みが見られる。E地点は急勾配の斜面であり、昇降には不自由である。曲輪1の東側には曲輪2があり、南には土塁1の延長線に土塁状のFがある。曲輪1・2の連絡路としてはB～Fが最も可能性が高く、Fは土塁兼用の昇降口と思われる。曲輪2と曲輪3の間には空堀1がある。大手口から登ってくると、この空堀1に達する。

空堀1より東には、曲輪8まで小規模な平坦地が階段状に配置されている。これらには西から順に曲輪3～7と呼称することにする。どの坂も急勾配であり、曲輪5には高さ違いのG・Hが虎口を構成している。曲輪7のJも同じ構造である。

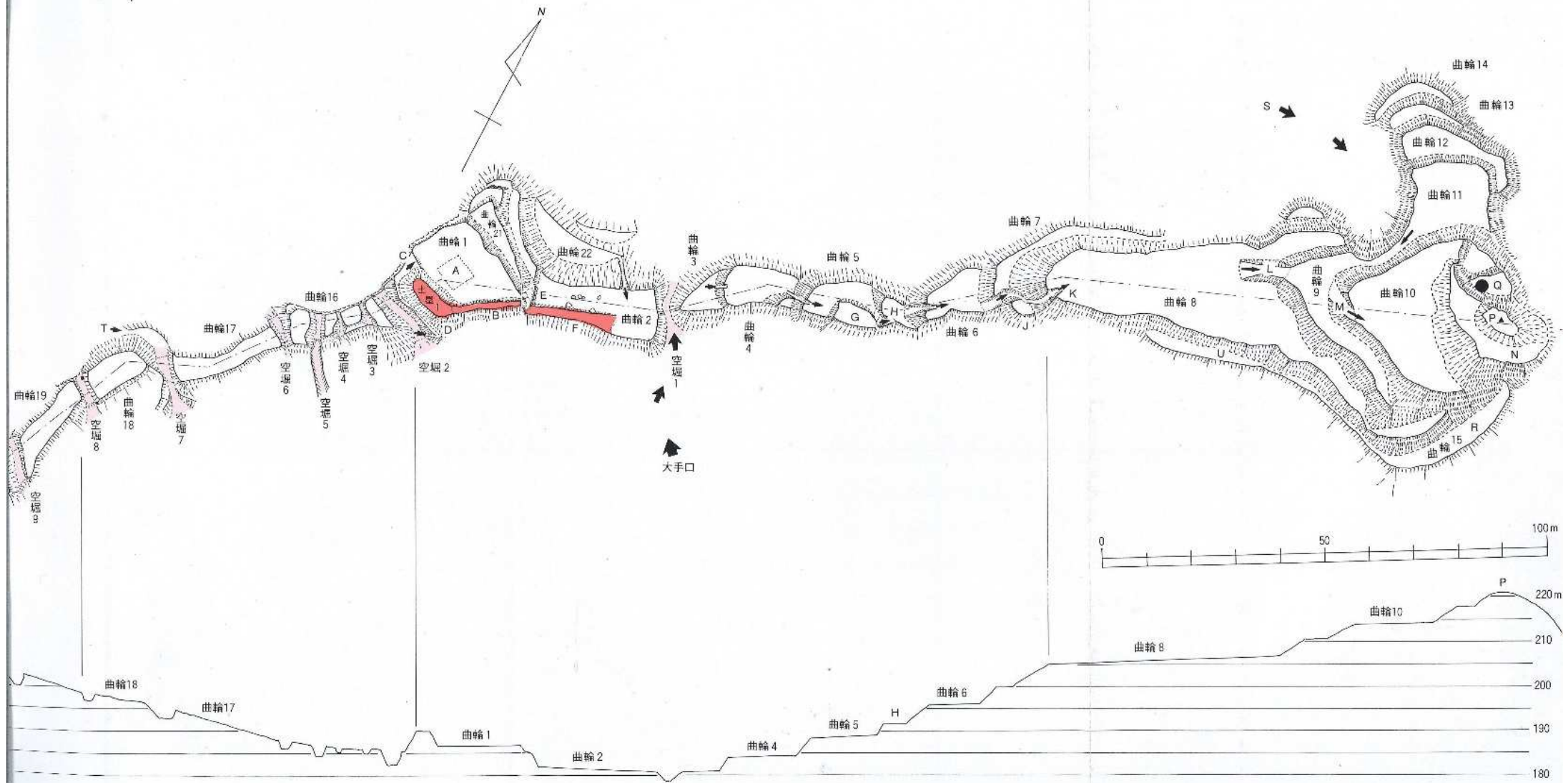
曲輪8は南北約22m×東西約65m、面積1,045㎡あり、城内で最大規模である。東西には曲輪15と曲輪7が犬走り状にめぐる。東には曲輪9への虎口Lが設けてある。曲輪9は曲輪10西側を取り囲む。曲輪9の北東にある通路を下ると曲輪11へ至る。広さは南北約16m×東西約14mある。曲輪11の北西斜面には階段状に曲輪12～14が配置されている。山麓西側からこの曲輪群に囲まれたS方向へ登ってくることは可能であるが、曲輪への明確な出入り口は不明であった。曲輪10は城内で最も高所にあり、東にあるNは標高220mである。北側にあるQ・Pは曲輪10よりも低い地点にある。Pには岩劔大明神の石祠跡がある。この曲輪10から東側は断崖絶壁であり、登攀は困難である。空堀2より西側には、城外の遺構として尾根上に大小9本の空堀が設けてある。尾根は西側が絶壁を含む急斜面であり、東側は高さ約3～4mの段差がある。この段差が人為的なものかどうかは不明であった。尾根の幅は約4～6mあり、尾根上には空堀2・空堀6～空堀10が掘られている。空堀間には尾根の斜面地が残り、平坦地ではないが、便宜上曲輪16～曲輪20と番号を付けた。

空堀2と空堀6によって区切られた曲輪16には、尾根上にさらに小規模な空堀が3本(空堀3～5)設けてあり、土塁1の防御面から興味が持たれる。また、尾根の東側に扇状に広がる斜面には、各空堀の延長部分があると考えられるが、今回の調査では確認できなかった。同じく空堀10の延長線上には斜面部を上下に分ける段差約2mがあるが、これも城の遺構との関係は不明であった。空堀10の南には虎口があり、搦手口と推測される。この道を南西に約140m登ると山腹を走る山道に至る。この山道をさらに南へ登ると、惣陣鹿倉山(90頁参照)に達する。

現在、空堀8以北の城域は始良町有の山林であり、以南は島津興業株式会社所有の山林となっている。なお、**第6図**では既存の図面がなく、城の斜面部から山麓までを地形表現できなかった。城の遺構と周辺地形の比較は、**第5図**を参照していただきたい。

註①本書第2章9 戦国動乱期 17頁参照

②「三国名勝図絵」卷三十九 重富 岩劔城



第6図 岩劔城跡実測要図

2 平松城 所在地 平松字上星原

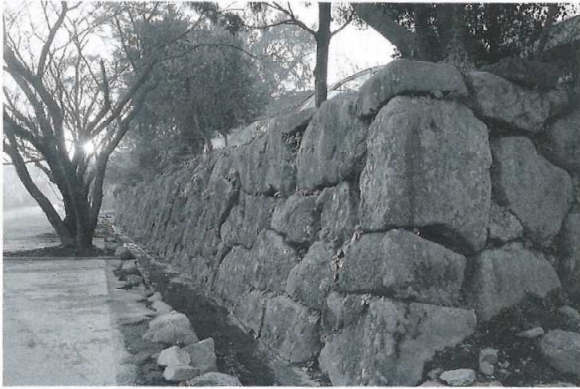


写真2 平松城跡石垣

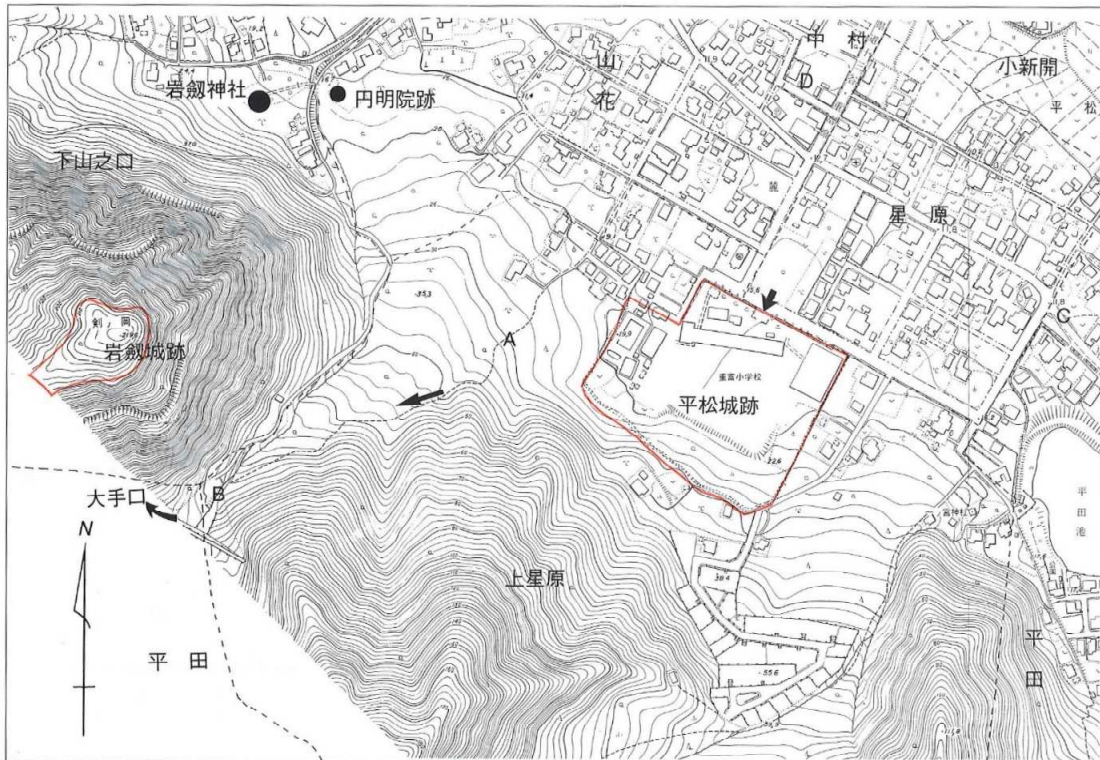
平松城は現在重富小学校となっている。天文23(1554)年、蒲生方の岩劔城が落城した後、岩劔城には島津義弘が在番することになった。しかし、山頂まで道は険しく日常生活には不便であった為、山麓に館を築いた。これが平松城の始まりである。

慶長5(1600)年の関ヶ原合戦直後にもしばらく在城している。

慶長10(1605)年から翌年にかけて帖佐館から当城に移り、加治木へ移るまで居館とした。慶長12(1607)年にはここで義弘夫人

が亡くなっている。その後、当城の屋敷には義弘の娘御屋地様が亡くなるまで住んでいる。江戸時代中頃の元文2(1737)年、藩主島津継豊は弟の忠紀に越前島津家を再興させて第16代とした。翌年帖佐郷の脇元村・平松村・船津村・春花村・触田村を割いて、重富郷とし越前島津家の領地とした。そして、平松城は越前島津家の居館となり、城下には麓集落が形成された。明治維新後の明治21(1888)年には、平松小学校が当地へ移転した。以下第7図により周辺地形の説明をしたい。

平松城域は図中のほぼ朱線内と推測される。小字は上星原であり、正面石垣の前面には幅11m・長さ約275mの「館の馬場」がある。「館の馬場」は昭和57年にカラー舗装となっている。

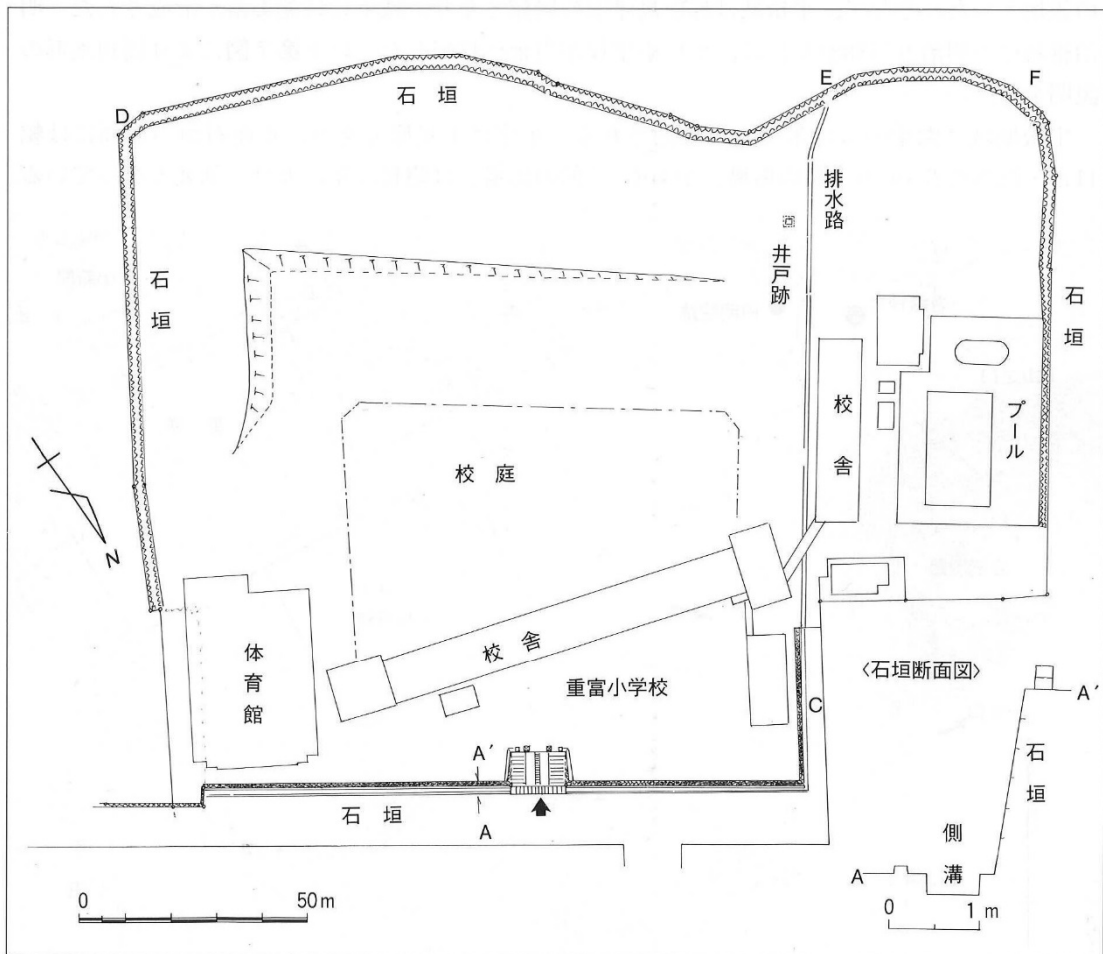


第7図 岩劔城跡・平松城跡周辺地形図及び小字図

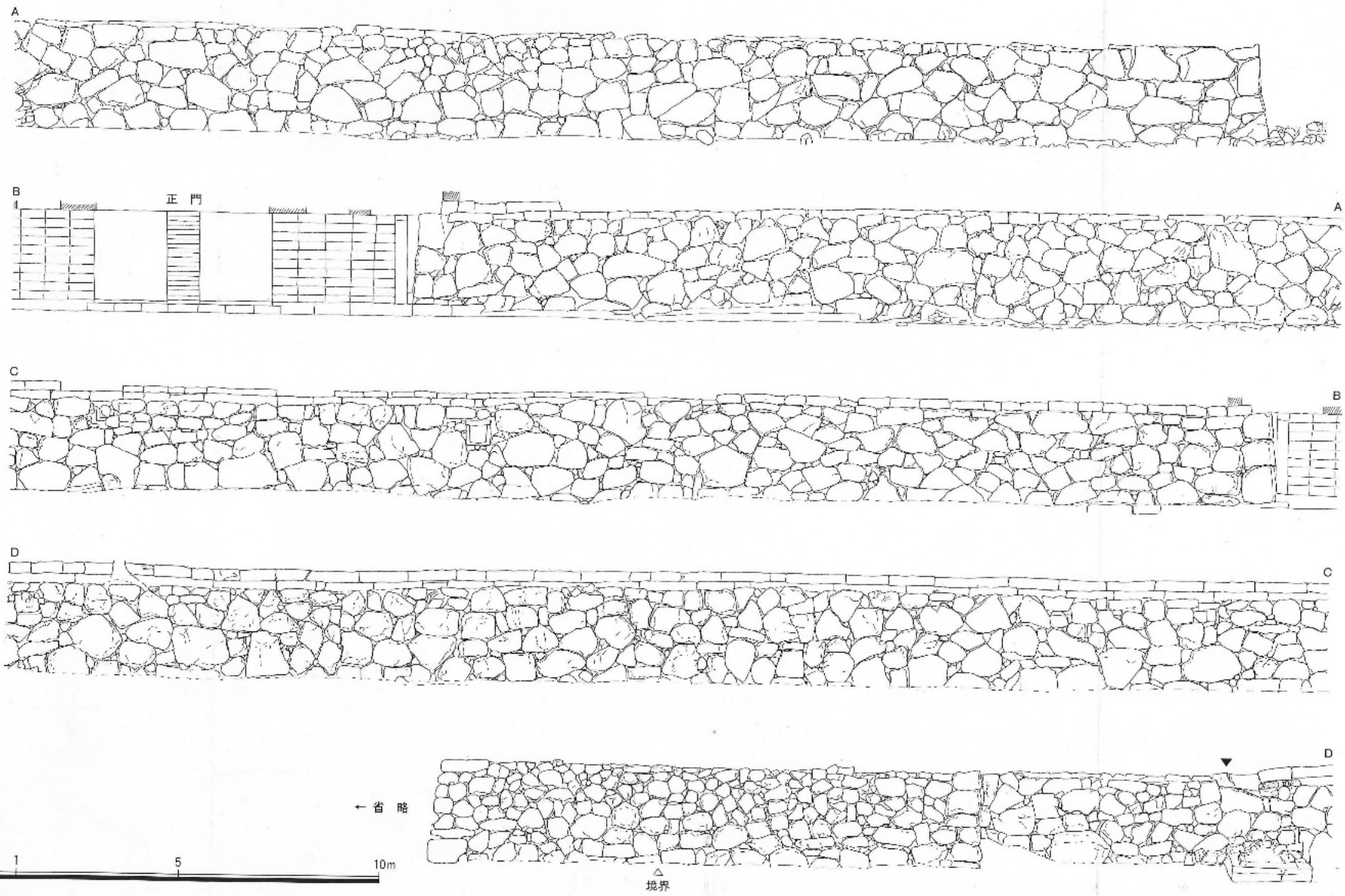
平松城から岩劔城へ行く道筋は明確ではないが、平松城西側から通路Aを経てBに至る道であろう。Bは岩劔城の大手口であり、ここから西へ折れて急坂を登ると山頂に達する。

第8図は平松城の平面図である。平松城の築城以来、ここには様々な施設が設けられており、築城時の遺構は小学校正面の石垣のみと推測されるが、この石垣も正門を含め、随所で改修が行われていると推測される。図中体育館の位置には、昭和5年以前に村役場が置かれていた。西側の山際には井戸跡が残る。その南西の石垣下には暗渠Eがあり、山水を流す排水路とつながる。この排水路を境に東側が本丸、西側が二の丸と伝えられる。正面石垣を除いて、城の周囲(D~E~F)には、延長約430mの石垣がある。この石垣は内外面とも石積みであり、高さは2~4mあり、南側が最も高い。D地点は昭和54年の道路改修により積み替えられている。また、体育館の北東の土地(平松5638-2)は約14m×約43mの広さがあり、以前は隣地と同じく一段低い土地であったが、昭和55年に体育館建設のため造成された。この土地は城の鬼門にあたり、正面石垣はここで(第9図参照▼)直角に折れ、約37m先で再び南東へ折れていた。

第9図は、昭和38年9月に始良町指定史跡となった「平松城跡石垣」の側面図である。現在の重富小学校正門にある門柱は、以前鹿児島県庁の正門に使用されていたものである。石垣の高さは平均約2.2mあり、その上に2段の切石が積んである。石垣の積み方は、野面積みと呼ばれる荒い空石積みである。石垣前面の側溝は、幅60cm・深さ22cmある。



第8図 平松城跡平面図



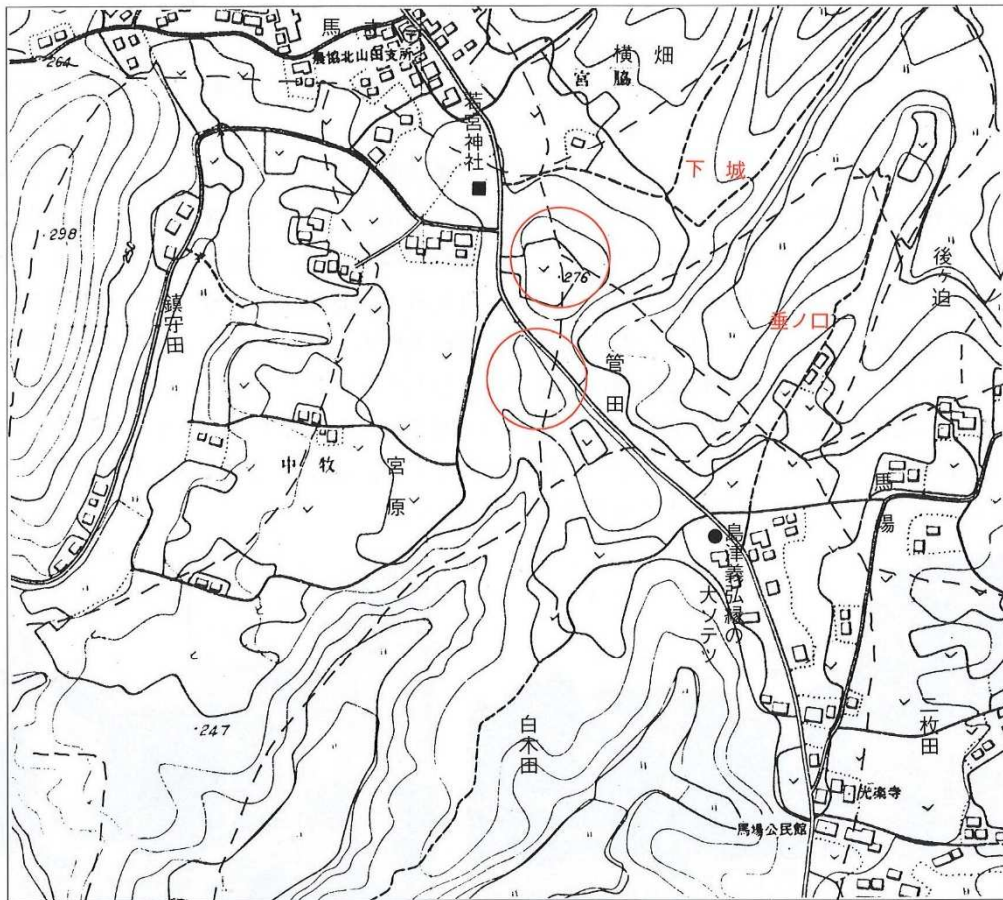
第9図 平松城跡石垣実測図(折込み図)

3 下城 所在地 北山 字下城 , 垂の口, 管田

下城は馬場集落から県道十三谷・重富線を北上した途中の山中にあり、北端には若宮神社、その北には宮脇集落が続く。下城はシラスの堆積した丘陵上にあり、北東部と南西部には大きな浸蝕谷が発達している。寺師・上名（もと山田郷）や米丸（蒲生郷）から延びた旧道は尾根を伝い、それぞれ山元や北野で合流しながら、下城の南側馬場集落へ至る（第10図）。ここから宮脇を経て中甕へ至るには、下城を通過した方が容易であり、この城は交通の要路を押さえている。山城の中央部（第11図中曲輪3西側）は、昭和15年頃の県道改修工事により破壊されたと考えられる。なお、県道西側の曲輪群を地元では城の段と呼んでいる。

山田地頭であった梅北国兼は、弘治2（1555）から文禄元年（1592）にかけて北山を含めたこの一帯を治めていた。この間に下城と中城は整備されたと思われる。以下付近の史跡を紹介する。

馬場集落北側にある小川家には、昔島津義弘が狩りの途中よく立ち寄ったといわれ、義弘が休んだ所にソテツと白藤を植えられ、記念の石祠が建ててある。また、宮脇の町立北山診療所前の道を木津志へ下ると、右手に七つ島という小さな塚がある。文禄元年（1592）梅北国兼が肥後で挙兵後、佐敷城で殺されるという事件が起きた。この時、梅北の家臣七名が事の顛末を知らせるため北山へ帰国し、その後この地で自害したと伝えられている。



第10図 下城跡周辺地形図及び小字図

下城の現況縄張りについて、以下第11図下城跡実測要図で説明する。

下城の主郭部は、南北に連続する曲輪1, 3, 4, 5と考えられ、標高はいずれも275m前後である。これら主郭の周囲には小規模な曲輪がみられる。城の東側は急崖であり、西側は浸蝕谷を利用した空堀12によって区画される。曲輪3の東部は県道工事により破壊されている。

第11図の南側から詳細な遺構の説明をすると、W地点はソテツ群のある小川家の北側にあたる。南から空堀11を登り切ると右手に土塁10（高さ約2.4m）が見える。ここを左折してV地点を抜け、曲輪10の裾に沿って約80m進み右折する。空堀12に突き当たり東に折れると、左手には急崖の空堀10が平行し、右手には曲輪10, 8, 7, 6が階段状に並ぶ。この入口を大手口と想定した。この大手口から空堀9, 10へと連続する区域によって、城域は南北に区画される。つまり、土塁7のある曲輪6を頂点とした曲輪7~10の曲輪群は、東へ向いており、大手口への備えと考えられる。空堀9から曲輪5へは、虎口Uを抜ける。土塁6は高さ約50cmほど残る。曲輪5の北西部に3段の小曲輪があり、南西部にも小段Tと空堀がある。曲輪5の北側には空堀7, 8がある。空堀7の東X地点は急崖となっている。曲輪4には虎口Rが一部残るが、空堀7からの連絡は不明である。曲輪4の面から現県道までの高低差は約15mある。空堀6には空堀7からの連絡路が想像されるが、県道工事により破壊されている。同じくN・M地点の旧地形も破壊され、地下されていると予想される。

空堀6から通路状のPを経ると曲輪3へ至る。曲輪3の東部Yは最も破壊を受けていると思われる。昭和15年頃の工事の際、刀が数本出土したと伝えられている。L地点は曲輪3に対して緩斜面をなしており、曲輪3の東部斜面の残欠であるかもしれない。空堀3と空堀4はほぼ同レベルであり、もとは一連の同じ空堀であったと考えられる。また、空堀3の東には空堀5が続き、空堀4は空堀12へと連続する。ここで城域は再び南北に大きく区画されていたと推測される。曲輪11はE地点と同レベルであり、帯曲輪状に連続していたと想像される。H地点から曲輪1と土塁5に挟まれた空堀2を通過してもK地点へは通じず、空堀Jで行き止まりとなる。E地点から土塁2, 3を伴う空堀1を抜けて西へ折れると、B地点へ至る。そのまま直進すると絶壁の空堀Cへ達する。土塁1のあるA地点が曲輪1の虎口と思われる。曲輪1の北端には町配水地がある。曲輪1と曲輪2の境は南端では判然としない。

曲輪1の北西約100mには若宮神社がある。この境内が城域に含まれるかどうかは今回の調査では確認されなかった。しかしながら、神社境内とF地点はほぼ同レベルであり、県道改良工事前は一団の土地であった可能性を指摘しておきたい。

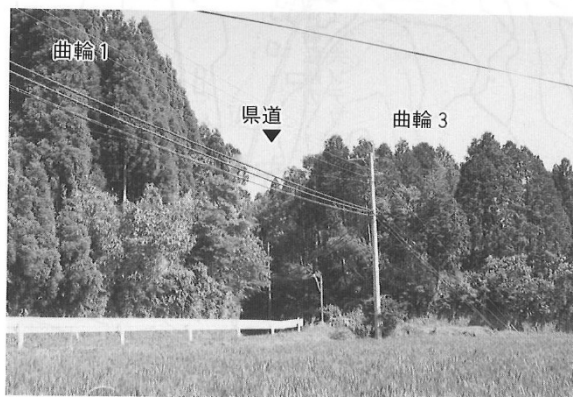


写真3 下城跡遠景（北から望む）



写真4 北山若宮神社